

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370300

研究課題名(和文) <女の悲劇>の再評価 18世紀劇場とセンチメンタリズム言説の影響関係に関する研究

研究課題名(英文) Reevaluating the 'she-tragedy': a study of the interrelationship between the sentimentalism and the eighteenth century theater

研究代表者

福士 航 (Fukushi, Wataru)

東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号：10431397

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1680年代から1710年代にかけて流行した 女の悲劇(she-tragedy)を、18世紀劇場文化とセンチメンタリズム言説の関連という文脈で再評価することを目的とした。風紀改良運動などと影響し合いながら、女の悲劇は、観客に「憐れみ(pity)」の感情を喚起することに特化し、感情共有体験の提供を目指す18世紀劇場文化の発展に極めて重大な寄与をしていたことを明らかにした。当初目指した道徳哲学と18世紀劇場文化との影響関係の調査は十分に進展せず、今後の研究課題とした。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to reevaluate the 'she-tragedy' in terms of the interrelationship between sentimentalism and the eighteenth century theater. This research has argued that the 'she-tragedy' was an important part of the eighteenth century theater in which the theater managers and the dramatists aimed to share 'emotions' with the audience. The 'she-tragedy' specializes in representing the emotion of 'pity' through the female protagonist's plight caused by her 'improper' sexuality. Some discourses, like the moralistic opinion maintained by the society for the reformation of manners, shared the same attitude. This research also aimed to reveal the interrelationship between the moral philosophy and the eighteenth century theater, which was not fully successful and still needs more detailed study.

研究分野：英文学

キーワード：英文学

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、女の悲劇 she-tragedy は、感情過多で文学的価値には乏しいという評価が一般的だった。本研究代表者は、しかしながら、演劇におけるジェンダー・セクシュアリティ表象の研究を継続しており、その中で女の悲劇の演劇史的重要性を認識し始めていた。平成21年度～23年度科研費若手(B)研究課題「なぜ長い18世紀の英国の劇場では女優だけが黒塗りをしなかったのか？」において、人種的 他者 の表現法である黒塗りの慣習におけるジェンダー間の非対称性に焦点を当てた。その中で18世紀演技理論の検討を研究課題の一つとし、俳優は内面に宿った感情を演技で表現するべきだという考え方と、俳優・観客間で感情を共有することが優れた上演には必要であるという認識が、「長い18世紀」(1660-1800)を通底していることを確認してきた。その結果、「感情の共有」という視点から18世紀演劇を読み直すと、等閑視されてきた女の悲劇の再評価に通じるのみならず、当時の英国的心性をより深く探求できるという着想を得た。

女の悲劇は、意図せずに不適切な性的関係(近親相姦、重婚など)を持ってしまった女性が板挟みに苦しんだ末に命を落とす、という構造的特徴を持ち、苦境に陥る女性をいわば見せ物にする悲劇である。従来女の悲劇は、文学的価値が低いメロドラマで、一時期に流行したサブ・ジャンルにすぎないとされ、ほぼ等閑視されてきたが、近年フェミニズム批評による読み直しが行われている。Jean Marsden, *The Fatal Desire* (2006)は、映画研究で発展した視覚快楽論を援用し、女優が男性観客の欲望に満ちたまなざしに晒されるという視線の権力関係を批判している。しかるべき批判ではあるが、Marsdenの論では、女の悲劇が男性観客よりむしろ女性観客に人気があった事実をうまく説明できない。一方で Lisa Freeman, *Character's Theater* (2002)は、18世紀劇場は、観客が俳優や周囲の観客と社会的な繋がりを取り結ぶための「交流の劇場」であり、そこで観客は他の観客に見られることを十分意識していたと論じている。本研究では、この立場を支持し、女の悲劇を「交流の劇場」の重要なコンテンツと捉えた。文学的審美基準のみをもって判断してしまうと、同情の涙を狙った女の悲劇の上演において、観客が涙を流すことで周囲の人間と関係しあう機会を得ていることの重要性を見逃してしまいかねない。18世紀演技論や演劇史的文脈に女の悲劇を置き直すことで、その重要性を再評価することを研究の目的に据えることとした。

2. 研究の目的

本研究では、1680年代から1710年代にかけて流行した女の悲劇(she-tragedy)を、

18世紀劇場文化とセンチメンタリズム言説の関連という文脈で再評価することを目的とした。女の悲劇は、感情過多で文学的価値に乏しいと過小評価されてきたが、劇場史的観点から読み直すことでその重要性が理解できることを主張した。「長い18世紀」の劇場の企図を、劇テキスト、演技理論、観劇記録などから総合的に検討すると、感動を生み出す観劇体験には、俳優と観客との間で感情の共有が必要であると認識されていたことが浮かび上がってくる。風紀改良運動や道徳哲学とも影響し合いながら、女の悲劇は、観客に「憐れみ(pity)」の感情を喚起することに特化し、感情共有体験の提供を目指す18世紀劇場文化の発展に極めて重大な寄与をしていたことを明らかにすることが、本研究の目的であった。

3. 研究の方法

上記のような研究を行う中で、鍵になるのは、女の悲劇の表現する「感情」である。劇テキスト、演技理論、観劇記録などを総合的に検討し、感情共有の体験を提供することが劇団側の根本的な目的であることを確認した。アリストテレス以来、悲劇の表現すべき感情は恐怖と憐れみの二つとされてきたが、女の悲劇は、より「売れる」憐れみの表現に特化し、どのような人物が、どのような状況に陥った時に、観客がもっとも同情できるかを実験的に追求し、観客に憐れみの感情を共有する体験を提供しようとしたジャンルであることを示した。

劇場史的観点から見ると、女の悲劇は、王政復古以来の劇場において、はじめて憐れみという単一の感情表現に焦点を当てた劇であり、感情共有を目指す18世紀劇場の一つの大きな流れを与えたことも見えてくる。Richard Steeleは *The Conscious Lovers* (1722)で同情の涙を喜劇に持ち込んだセンチメンタル・コメディを展開し、人気ジャンルを形成することになるが、女の悲劇は、憐れみへの傾倒と観客の涙を誘うドメスティックな主題という点で、センチメンタル・コメディへの道筋を用意したことも明らかにしようとした。

具体的に検証した劇テキストは、Thomas Otway, John Banks, William Congreve, Thomas Southerne, Nicholas Roweらによる女の悲劇群で、それぞれの劇が作りだす状況、登場人物などの劇中の要素に加えて、プロローグ、エピローグ、出版に際しての献辞など、より強く作家自身の声を代弁する部分も考察した。それによって、1)作家は、どのような状況・人物を観客たちから求められていると考えていたのか、2)その求めに応じるためにどのように対処したのか、を分析した。種々の演技理論が主張した「感情の共有による感動の提供」の重要性が、劇作家たちにも認識されていたことを確認し、共有できる感情を模索する劇作家たちの試みを

検討することが、本研究課題における仕事の大きな柱の一つであった。

もう一つの柱は、風紀改良運動や道徳哲学などのセンチメンタリズム言説と劇場のかかわりの検討である。Jeremy Collier, *A Short View of the Immorality, and Profaneness of the English Stage* (1698)以降、演劇の不道徳を指摘する勢力が拡大するなかで、演劇の有用性を主張した John Dennis や Richard Steele らは、演劇が道徳の模範を示すこともできる点を力説した。また、Shaftesbury が嚆矢となった 18 世紀道徳哲学の系譜において、17 世紀末の英国国教会広教派 (latitudinarian) の牧師たちによる「万人に対する善意 (universal benevolence)」の重要性を説いた説教の影響関係がこれまでに指摘されているが、同じ時期に展開した劇場における「憐れみ」重視の流れとこれらセンチメンタリズム言説とのかかわり合いは十分に論じられてこなかった。個人の内面に宿る道徳は、行動によって外部に示されることがなければ他者に認知されることはないのであって、道徳を重要視したセンチメンタリズム言説は本質的に演劇的な性質を持つものである。18 世紀初頭の時期に、演劇において内面の感情の可視化が目指されたこと、劇場文化の基盤に感情の共有という考え方があること、そしてセンチメンタリズム言説が発展したことは別個の事象ではなく、共有されている思想があるという視点から 女の悲劇 を読み直すことで、その歴史的重要性を新たに再評価することを狙った。

4. 研究成果

平成 28 年 3 月に、本研究の中間成果報告論文として、『英語英文学研究所紀要』第 41 号において、「She-tragedy における感情—*The Orphan* と *The Fatal Marriage* を中心に」を発表した。本論文では、she-tragedy で表現される感情と、それを観客がいかに受容していたかという見地から、おもに *The Orphan* と *The Fatal Marriage* という二つの作品を比較し、このジャンルが社会的に果たしていた機能を検証した。

本論文ではまず、Thomas Otway の *The Orphan* のもつ政治性を確認した。この劇は王位継承排除危機のさなか、議会派の攻勢が強かった時期にあたる 1680 年 2 月に初演された。王位継承権者の Duke of York は、当時、議会派による王位排除の動きが強かったため国外に亡命を余儀なくされていたものの、1680 年 2 月 24 日にイングランドに帰還している。熱烈な王党派支持者だった Otway はこれを祝福し、*The Orphan* の出版に際し、Duchess of York、Mary of Modena に宛てて献辞を書いており、現実世界の政治に、少なくとも作者が敏感であった事は確かである。また、実際にテキストはどちらかの党派に肩入れするような、単純なプロパガンダではな

いのだが、この劇の上演の歴史を確認すると、同時代人には政治色の濃い芝居だと認識されていたことが窺える。*The Orphan* は、18 世紀をつうじて上演され続け、最終的には 1815 年まで続くが、1688 年以降同時代の政治状況に、特に王党派あるいはジャコバイト支持の立場からコミットする可能性がある劇だと、同時代人には理解されていた可能性が高いことを確認した。

続けて、この劇の主演女優 Elizabeth Barry が、演技において流す涙の重要性を論じた。当時の演技術で重視されたのは、俳優が内面に感じた感情を、演技によって外部へと開くことで、それが循環的に観客の感動を呼ぶと考えられていた。種々の観劇記録から、Barry の演技が観客から涙を搾り取ったことがわかっており、この劇は Barry をつうじて観客に憐れみの感情を喚起することを明らかに狙っており、同時代人の証言から、その狙いは大いに達成されていたことを確認した。

同様に、Thomas Southerne による *The Fatal Marriage* (1694) でも、主演女優は Elizabeth Barry で、彼女の演技で観客の涙を誘ったことが記録から分かっている。女性の苦境を売り物にして、観客に憐れみの感情体験を提供すると言う点で、女の悲劇 の型を踏襲した劇である。

この劇に特徴的で、かつ 18 世紀のセンチメンタリズムとさらなる接点を提供したのは、Barry 演ずる Isabella が狂気に陥り、長台詞の独白を行う場面である。興味深いことは、「進み出ている私に気づく」とつぶやいてみたり、「場面がさっと変わる」などと、自らの動きを客観的に描写するような、あるいは芝居のト書きのような描写を繰り返すところである。観客はこの「発狂」の場面も憐れみの対象として享受したことが記録からも分かるのだが、この演劇的自意識に加え、「ぶつかり合う感情 conflicting passions がこの偉大な機械のちょうつがいを外してしまったのだ」と、妙に専門的に、機械論的生理学の用語を用いながらの独白になってもいる。この点に、たとえば王政復古以降の機械論の流行や、魂が脳に宿ると論じた神経生理学者 Thomas Willis と、その弟子 John Locke によって展開された、神経の働きによって感覚が伝えられるとする感覚心理学 sensational psychology との接続が可能かもしれないと、中間成果報告論文の段階では示唆するにとどめた。

以上のように、中間成果報告論文では、劇テキストが表象することを狙う感情と、その観客間での受容、さらに触媒となる俳優の演技についてまとめた。

その後、中間成果報告論文の段階で必要性を感じていた、王政復古以降の哲学・心理学・神経科学の入り交じったセンチメンタリズムの言説のさらなる調査を行ったが、これが困難を極めた。その理由は、一つにはその対象とするテキスト群が膨大すぎたことが

ある。研究開始時には、18世紀初頭の時期に、演劇において内面の感情の可視化が目指されたこと、劇場文化の基盤に感情の共有という考え方があること、そして道徳を説くセンチメンタリズムが発展したことの背後には共有されている思想があるだろうという確信をもっていたが、それらが別個に存在することは明らかに論じられても、それらの明確な接点を把握し説得的に論じられると考えには至らなかった。引き続き研究課題の一つとし、まとまった段階で論文のかたちで成果発表したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

福士航「She-tragedy における感情—*The Orphan*と*The Fatal Marriage*を中心に」『英語英文学研究所紀要』第41号、27-58頁。

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

福士 航 (FUKUSHI, Wataru)
東北学院大学・文学部英文学科・准教授
研究者番号：10431397

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()